

採血業務改善に向けた取り組み

◎畠山 令¹⁾、田中 芳次¹⁾、岡崎 陽子¹⁾、石井 浩崇¹⁾、後藤 寛子¹⁾、長岡 祐美¹⁾、武智 留美¹⁾、
吉原 紘子¹⁾
N T T東日本 伊豆病院¹⁾

(目的) 当院では2015年より採血困難患者に対して紙での採血カルテを作成し、次回採血時に役立ててきた。しかし近年、「記入が煩雑である」「業務繁忙時に記入する時間がない」などの理由から、作成件数が少なくなっているのが課題であった。そこで2018年より、採血システムを利用し、採取部位の記録を残せるよう取り組みを行ったので報告する。

(方法) 上肢を13区画に区分し1から13の番号を付け、採血困難患者対応時に採取した部位の番号を採血システムに入力することとした。対象期間は2018年4月から2019年3月までの1年間とし、前年度の採血カルテ作成件数との比較を行った。また、採血従事者に対して利用し易さについてのアンケート調査を行った。

(結果) 採血システムから新たに入力された採取部位の件数は113件であり、前年度の23件に比べ大きく増加した。採血従事者に対するアンケート調査では「使用しやすくなった」の回答が87%と多く、主な理由としては「閲覧および記入にかかる時間が短くなったため」が75%であった。

(結語) 採血システムを利用した採血カルテの運用は、紙での運用に比べ使用し易く、データ蓄積件数の増加につながった。今後は、採取部位の区分を細かくするなどの改善を行いたい。